就労移行支援事業所を利用された重度失語症の方の支援報告
～医療情報と就労訓練から見えた強みと企業に求める配慮、採用の決定打

○柏谷 美沙（特定非営利活動法人クロスジョブ クロスジョブ札幌　就労支援員）

１　はじめに

失語症者の社会復帰を支援するには、森田・春原[1)] によれば、医学的・社会・職業リハビリテーションを円滑に行うために対象者の「全体像」の把握が大切であるとされている。医療機関と協力して全体像を把握し、「強み・障害特性・配慮」といった対象者の全体像を企業に伝えるアイテムを作成して就職したいという希望を叶えた事例を報告する。

２　事例紹介

⑴ 対象者

由美さん（仮）、40代、女性。心原性脳塞栓症に伴い失語症を発症。夫、息子と同居。近所にご両親が住んでおり、書類手続き等はお母様が付き添われた。由美さんは退院後、「働きたい」とご家族に希望を伝え、通所リハビリテーションの担当言語聴覚士に相談。言語聴覚士からクロスジョブへ「重度失語症の方でも利用が可能か」と相談が入り利用に繋がった。

⑵ 利用前にいただいた医療情報

表１　入院時、標準失語症検査（SLTA）結果

検査項目	結果	目標値
呼称	9/20	20/20
口頭命令に従う	0/10	5/10
動作説明	3/10	8/10
語の列挙	0語/1分	10語/1分

検査結果以外に医療機関から頂いた情報は以下のとおりである。

聴く、話す、読む、書く、計算、全ての項目で重度の障害がみられた。「理解」は、親しみの無い言葉の理解が不十分。「発話」は、単語レベルで表出されることはあるが２語分程度。伝えたい言葉を想起できるが音への喚起が困難。「読解」は、簡単な内容であれば短文レベルまで可能。「音読」は、使用頻度の高い文字であれば可能。「書字」は、メモなどに利用することは困難。「計算」は、困難。言語機能以外は概ね良好に保たれ、状況からの理解が良好。伝えたい内容は、簡潔にまとめ、使用頻度が高く親しみのある言葉を主に使用し、口頭言語のみではなく、文字言語、ジェスチャー、実際に使用している所を呈示、絵や写真、図、コミュニケーションボードの併用が有効である。

⑶ 利用開始後、医療情報から工夫をして開始した訓練

最初に、注文書を見ながら商品を集めるピッキング訓練を行った。支援員が一通り作業をして見本を見せ、次に由美さんが作業を行って、間違っていたらその場で支援員が正しい行動を見せるようにした。文字から物をイメージする、文字を読み上げるといったことはできなかったが注文書の文字とピッキング棚の文字を照らし合わせて商品を集めることができていた。その他の作業も同様の教え方をすることで、会話が無くても行えることがわかった。

由美さんから伝えたいことがある時は、携帯の写真を見せる、現物を見せる等をして伝える工夫をされており、自ら意思疎通を行おうとする積極性が見られた。

また、訓練ができることが「楽しい」と何事にも前向きな性格を発揮され、気遣いをする性格、優しい表情、ニコニコと話を聞く姿勢から人付き合いが不得手な他利用者からも親しまれていた。

病前から夫と一緒に家事を行っており、家族と協力して家事を行い生活が安定していたため、毎日休むことなく楽しく訓練に通われた。

⑷ 施設外就労訓練（クリーニング工場）

利用開始後、施設外就労先のクリーニング工場にて洗濯、洗濯たたみ作業を実施した。華奢な体からは想像ができないが１日４時間力仕事をする体力があり、重い物を持つ力があった。

支援員が見本を見せて３回ほど一緒に行うと作業を覚えられた。メモ取りが困難なため、久しぶりに行う作業を忘れてしまうことがあるが支援員が見本を提示すると思い出して作業ができた。

困った時には「これ」と物を指さして意思表示ができ、由美さんも支援員も意思疎通に困らなかった。洗濯物を数えて紙に数字を記入することはでき、電卓を使用すると簡単な足し算ができた。用紙に記入しなければならない文字も見本があると書き写せた。洗濯回数、洗剤の種類など、複数の指示がある作業は、メモ用紙に書いて見せながら読み上げて説明するとイメージが伝わるとわかり、訓練用の指示書を作成して、指示を書いて渡すことで、１人で行える作業が増えた。

⑸ 企業実習（クリーニング工場）

訓練では、見本を提示する、紙に書いて読み上げて指示を伝えるといった方法を行うと業務ができることがわかった。施設外就労先以外の企業で仕事を行っても由美さんが戸惑わないか、企業は対応に負担を感じないか確認をするため施設外就労先とは別のクリーニング工場で３日間の実

習を行って確認した。現場担当者から作業見本を見せてもらい、実際に作業を行って合っているか確認してもらうことで問題なく行えた。さらに、単語の発話やジェスチャーによって社員の方とコミュニケーションがとれており、次にどの仕事を行うか意欲的に考えて笑顔で楽しいと働く様子から１日で職場にとけ込む力がみられた。予期せぬ出来事として、１人の時に事情を知らない職員から「どなたですか」と聞かれ、単語やジェスチャーで実習生だと由美さん１人で伝えていたことがわかった。実習により、環境が変わっても、配慮が得られることで由美さんの強みを活かすことができ、由美さんと企業の負担が少ないことがわかった。

３　就職活動

⑴　面接練習

支援員と面接練習を行ったところ、緊張している時は、長所である笑顔が険しい顔になり、言葉が発話しにくくなることがわかった。由美さんの強みを伝えるためアイテムを作成して練習を行った。

⑵　面接アイテム①

由美さんの「失語症の説明」「仕事を覚える方法」「仕事をしている動画」「体力・人柄等の長所」を伝えるための資料を作成した。支援員が企業に資料をもとに説明しつつ由美さんに声をかけ、由美さんはジェスチャーや頷くといった非言語コミュニケーションで伝える練習を行った。

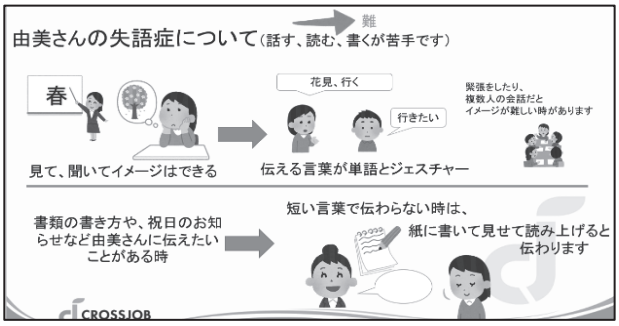

図１　由美さんの説明書

⑶　面接アイテム②

緊張して出にくくなる発話を促し、由美さんがご自分で気持ちを伝えるために、面接で見ながら話すカンニングペーパーを作成した。

由美さんと共に、伝えたい内容を確認し、作った文章を由美さんが読み上げて、発話しにくい単語の近くに最初の言葉の文字をイメージするイラストを入れた。「働きたい」が読めない時は、旗のイラストを見て「旗、働きたい」と連想して発話する練習を繰り返すことで言葉が出る回数が増えた。

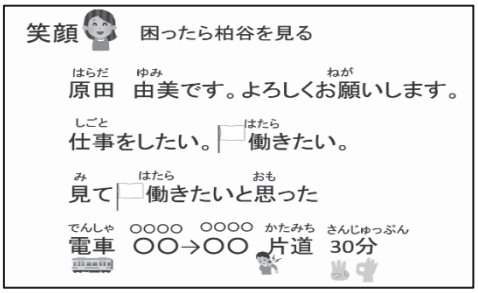

図２　面接のカンニングペーパー

⑷　採用

清掃員を募集していた企業へ由美さんと見学に行き、図１、２を用いて由美さんのことを紹介した。一度見学に行くことで、後日に行った面接では由美さんの緊張を減らすことができた。

企業からは、見学時に「安定して通勤し、働く体力がある」「前向きで好かれやすい人柄」「社内で行える合理的配慮」を聞いてイメージができたため採用を前向きに考えていたと言われ内定を頂いた。

４　事例を通して学んだこと

支援員が由美さんを取り巻く人や訓練の様子から情報を集め、失語、働く力、企業へ求める合理的配慮、家庭環境、性格といった全体像を捉えて企業へ必要な情報を伝えることで、企業は自社で雇うイメージができ採用に至ったと考えられる。支援員がアセスメントし、それを企業へ伝えるサポートを行うことによって、就職の可能性が広がることを由美さんの支援を通して学ぶことができた。

５　今後の課題

重度失語症のある方の社会復帰を促進するために、医療と地域の連携が課題である。支援者が重度失語症の方は難しい人というイメージを持つ可能性があるが知識や経験が無くても、当事者や家族、関係している専門職から教わりながら、目の前の当事者が力を発揮できる進め方を探すことで就職に繋がり、当事者の人生が変わる可能性がある。

働きたいと思われる当事者が障害の程度のイメージにとらわれず働く可能性を広げられるよう、医療と地域福祉サービスが協力し合える関係を築くことが重要である。

【参考文献】

1）森田秋子・春原則子『フレッシュ ST のギモンを解決！失語リハビリ Q&A』（2022）, p. 3-17

【連絡先】

柏谷　美沙
特定非営利活動法人クロスジョブ　クロスジョブ札幌
e-mail：kashiwaya@crossjob.or.jp